

30. シイタケ栽培試験

(2) 発生操作方法の改善試験

鳥海 晴夫

〔目的〕

シイタケ栽培は、施設の整備や規模の拡大に伴って栽培方法が多様化し、シイタケの発生量にバラツキがみられる。そこで、予備散水や寒ざらしなどの操作が発生量に及ぼす影響について試験し、効果的な発生操作技術の開発を図る。

〔方法〕

接種は予備散水試験が1990年、寒ざらし試験が1991年に行い、管理は通常の方法で行った。

予備散水試験は、散水日数2日、4日、6日、8日、10日、12日（1日あたりの散水量は $28\text{mm}/\text{分} \times 15\text{分} = 420\text{mm}$ ）の6区と散水時間5分、10分、15分、20分、25分（散水量は $28\text{mm}/\text{分} \times \text{散水時間} \times 6\text{日}$ ）の5区に分けた。

寒ざらし試験は、寒ざらし（水抜き）日数を0日、2日、4日、6日、8日、10日の6区に分けた。

〔結果〕

1. 予備散水試験（図-1、2）

散水日数別の発生量は、無散水区より26～59%増加し、相関係数は0.41であった。規格割合は散水8日区以上がL・Mの割合が多く大型傾向を示した。

時間別の発生量は、若干 増加傾向を示し、相関係数は0.71であった。規格割合では散水15分区以上がL・Mの割合が多く大型傾向を示した。

散水日数別と時間別の発生量を比較すると時間別の発生量が多く、危険率1%で有意差が認められたが、ほとんど同じ時期に発生試験を行っており、散水以外の因子が影響を与えたものと思われる。

予備散水は休養期間に散水することによってほだ木の回復を早め、発生量を増加させることを目的に行うが、1991年の夏期は台風が多く、無散水区でもかなり降雨の影響を受けたものと思われる。1992年の夏期は雨がほとんど降らず、予備散水に適した気候であったが、前年度の夏期にほだ木が痛んでしまい、ほとんど発生しなかった。したがって、発生量の差が散水の影響によるものかどうかははっきりしなかった。

2. 寒ざらし試験（図-3、4）

1年目の発生量は、寒ざらし区では2日が良好で寒ざらしの日が長くなるにつれて低下した。寒ざらしを長くすると、ほだ木が乾燥して発芽に影響を与えるものと思われた。また、寒ざらしを長くすると、きのこの発生が5～6日遅れ、規格もS・SSの割合が多く小型になる傾向があった。発生量については継続調査中である。

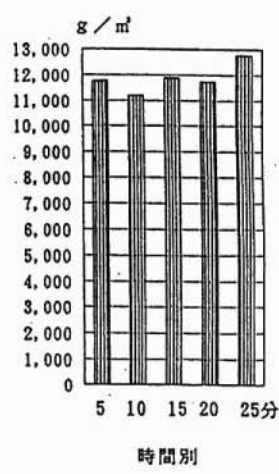
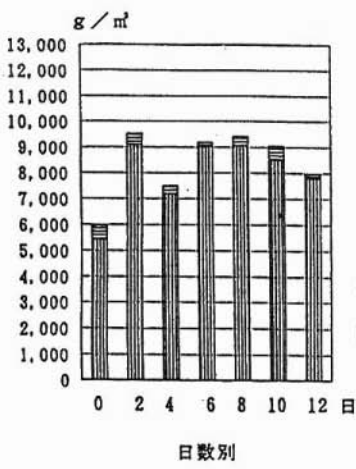


図-1 予備散水による発生量

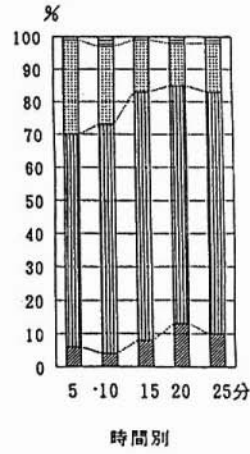
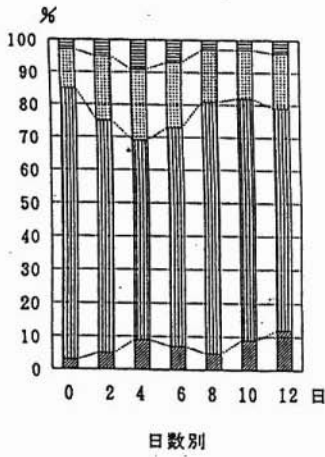


図-2 予備散水による子実体規格割合

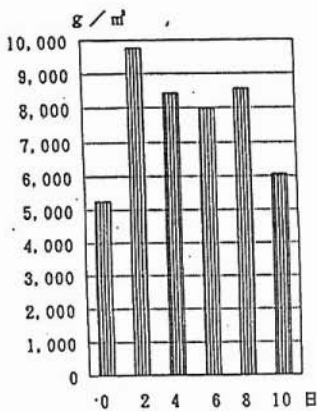


図-3 寒ざらし日数別発生量

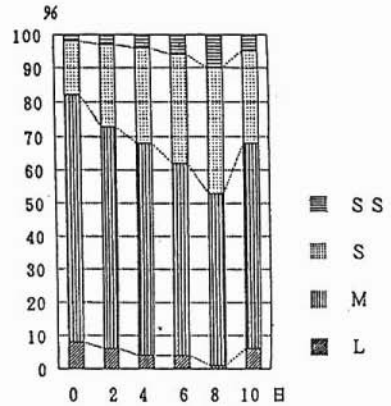


図-4 寒ざらしによる子実体の規格割合